

宮澤賢治と妹・トシ

遠 藤 均

星槎道都大学研究紀要

経営学部

創刊号

2020年

## 宮澤賢治と妹・トシ

遠藤 均

### 【序】

学生のとき、東京の本屋でたまたま手にした仏教学者・紀野一義先生の著書を通し、仏教と、『法華経』の思想を文学で表現しようとした宮澤賢治に開眼し、心が大きくゆさぶられた。

爾来、仏教研究に没頭し、二年くらいの間100冊以上読んだ。専門分野は異なっていたけれど。

院生のときには、哲学研究の一環として、紀野先生が主催する仏教研究会にも所属した。留学のため、日本を離れるそのときまで。

4年くらい前のことである。岩本芳修氏（STVラジオのプロデューサー）※から紹介された浄国寺住職・高橋浄英老師とお話して驚いた。

二人とも、紀野先生の仏教研究会に属していたからである。

それからまもなくのこと。思いがけず、老師から私の元に、紀野先生の講演CDが多数届いた。

ふたたび驚いた私は、御礼に、札幌円山にある浄国寺にうかがう。

すると、あにはからんや、さらに多くのCDをくださったのである。なんと奇麗な方なのだろう。みたば驚いた。

それ以来、折につけ、いただいた十数枚のCDをありがたく拝聴し、著書も読み返していたところ、「宮澤賢治と日蓮聖人」に関する朗読原稿の依頼が舞いこんだ。

思い返せば、紀野先生の御実家は、広島県にある日蓮宗のお寺であり、原爆により、ご両親が他界されていたのである。

これもなにかのご縁かも知れない。

この小論を書き終えて思う。

多くの方々に支えつづけていただいたことにより、より深く、宮澤賢治とトシを理解することができた。ふたりのひたむきで愛情あふれる生き方は、時代を超えて、力を与えつづけてくれよう。

僭越ながら、これを読まれる方にとっても、賢治とトシ

シの心の蓮が、心の糧となることを心より願わずにはいられない。

※岩本芳修氏は、先ごろ亡くなった日高晤郎を発掘し、STVラジオの人気番組「ウイークエンドバラエティ 日高晤郎ショー」をプロデューサーとして支えつづけてこられた方でもある。

### 【賢治と死 ①】

宮澤賢治は、幼いころから、年が二つ離れた妹・トシに深い慈愛をそそいできた。

彼女は、小学生のときから成績優秀。花巻高等女学校でも首席をとおり、「花巻中知らぬものとなない評判の才媛であった」<sup>(01)</sup>という。

そのトシが、女学校4年生のとき、恋に落ちた。

相手は、赴任してきた音楽教師・鈴木竹松。「目醒めはじめた芸術に対するあこがれと渴仰」<sup>(02)</sup>が、恋心をも目覚めさせたのであった。

トシは、彼からバイオリンを習い、下宿を訪れるまでになる。

そのさい、トシが人形をだきながら、「センセー、センセー」<sup>(01)</sup>と呼ぶ姿を同級生が目撃。あくる日、「見チャッタ、聞イチャッタ」<sup>(01)</sup>と、学校で噂の種にされてしまう。

しかも、鈴木竹松は、ともにバイオリンを習っていた同級生・大竹いほに好意をいただいていることを知り、失恋の痛手を負った。

そればかりではない。

あろうことか、卒業式（※大正4年3月23日）の三日前から前日まで、『岩手民報』（※20～22日）に「音楽教師と二美人の恋」<sup>(01)</sup>というタイトルで、悪意に満ちたゴシップ記事が連載されたのである。<sup>(註01)</sup>

けっか、彼女に降り注いだものは……。

「曾て味わった事のない痛い痛い衆人の非難冷笑の眼と、彼（※鈴木竹松）からの明らかな疎隔」。「きのふまで友人とのみ信じてみた人の思ひがけない裏切り」<sup>(02)</sup>であった。それは、「魂を押し潰すかと思はれ」<sup>(02)</sup>るほどの「悲しみやおどろきや苦しき」<sup>(02)</sup>をもたらし、彼女が

ら「平安」と「喜びと安き眠り」<sup>(02)</sup>とを奪い去る。

とりわけ、家族思いのトシにとって、「自身を悲しむ以上に彼等（※家族）に悲しみを与へたと云ふ事程…痛い打撃はなかった」<sup>(02)</sup>。

そんな悪夢の嵐が吹き荒ぶなか、17歳の少女は、卒業式当日、卒業生総代として答辞を読んだ。「きのふまでの…名誉心も自尊心も凡てふみにじられ」<sup>(02)</sup>、「痛い誹謗の矢を雨の様に受け」<sup>(02)</sup>ながら。

娘を深く案じ、「一日も早くこの苦しい学校と郷里とからのがれ度いと云う願ひ」<sup>(02)</sup>をくんだ父親は、東京の日本女子大学家政学部に逃がした。

——「学校から逃れ故郷を追はれた」<sup>(02)</sup>トシは、21歳で大学を卒業する。

その後、彼女はどんな道を選んだのだろうか？

22歳の大正9年9月。英語と家事を受けもつ教諭心得として、かつて汚辱にまみれた母校・花巻高等女学校の教壇に立った。つらい「過去の記憶を抱」き、「到る処に針のむしろにある思ひを捨て」られず、「『男の先生』と云ふ様な詞にまで…刺される様な人知れぬ苛責を感じ」ていたにもかかわらず。

そのわけは、トシがこう考えたからである。

「未だ償はずに居るものを償ひ恢復すべきものを恢復して新しい世界にふみ出し」、「過去の重苦しい囚はれから脱し超越して新しい自分を見出」<sup>(02)</sup>したい。

「多くの人の心を傷つけた」「過失を相殺する」<sup>(02)</sup>ために、「恢復された人生に対する勇氣と自由とをこれからの…仕事に表はさねばならぬ」<sup>(02)</sup>

「人のためになりたい、郷土のために働きたい」<sup>(註02) (01)</sup>

しかし、再度、「不自然な苦しい努力」<sup>(02)</sup>によって、「弱い糸を極限まで張った様な…状態はついに、身体の病となって現はれた」<sup>(註03) (02)</sup>。

一年後の大正10年9月。咯血し、倒れてしまう。

「トシビヨウキスグカエレ」<sup>(03)</sup>  
純正日蓮主義を信奉する国柱会東京本部で修業中の賢治のもとに、急を告げる電報が届く。

すぐさま賢治は、書きためた原稿を茶色の大きなトラックにぎっしり詰めこみ、故郷の花巻（※現在の岩手県花巻市豊沢町）に舞いもどる。

——妹・トシの病気は、当時、不治の病の肺結核だった。

しかし、賢治は、いちずに快復を期し、献身的にトシ

の看病をつづける。

されど、病状は悪化の一途をたどるばかりであった。

——死の足音が間近に迫るころ。

すれちがう兄妹の、切なくも愛しい心情が、『無声慟哭（※声を出さないで号泣すること）』という詩に刻まれている。<sup>(註04)</sup>

死期を悟ったトシは、家族のなかで、「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」である賢治に、救いを求め、「どんなちいさな表情もけつして見通さないやうに」、目で追う。<sup>(04)</sup>

ところが、肝心の賢治は、いつしか『法華経』（※妙法蓮華経の略称。大乘仏教の経典のひとつ）への信仰がぐらつき、まさに、青ぐらい修羅（※阿修羅道、迷いの道）<sup>(註05)</sup>を歩いていた。

すなわち、「あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてみて」、「巨きな信のちからからことさらにはなれ」ていたのである。<sup>(04)</sup>

また、「純粹やちいさな徳性のかずをうしなひ」、「毒草や蛍光菌のくらい野原をただよ」っていた（「ほかのひとのことをかながへながら森をあるいてゐた」）のだった。<sup>(註06, 07, 08) (04)</sup>

そのため、「たましひは疾み鳥さへ正視ができない」<sup>(04)</sup>精神状態にあったのである。

嘘のつけない実直な賢治は、「かなしさうな眼を」<sup>(04)</sup>するばかりで、妹と、まともに向きあうことさえできないでいた。<sup>(註09)</sup>

けれど、兄の迷いを知るよしもないトシは、それが自分のせいだと思いこみ、そばにいた母親に問いかける。

「私は、怖い顔をしてるんでしょう？（おら、おかないふうしてらべ）」<sup>(04)</sup>

だから、賢治兄さんは、私をまっすぐに見ることができないのでしょ？、と。

母は、こう答える。

「いいえ、すごくきれいな顔をしているよ（うんにやずるぶん立派だぢやい）」

賢治も、心のなかでつぶやいた。<sup>(04)</sup>

「ほんたうにそうだ  
髪だつていつそうくろいし  
まるでこどもの苹果の頬だ  
どうかきれいな頬をして

あたらしく天にうまれてくれ」<sup>(04)</sup>

が、死にさいし、必死に救いを求めるトシは、たたみかけるように母に問うた。

死にかけているのだから、「それでも身体が臭いんでしょう？（それでもからだくさがべ？）」と。<sup>(04)</sup>

母は答えた。

「いいえ、すこしも（うんにや いうこう）」<sup>(04)</sup>

そのやりとりを聞いていた賢治は思った。

「ほんたうにそんなことはない  
かへつてここはなつのはらの  
ちいさな白い花の匂いでいつぱいだから  
ただわたくしはそれをいま言へないのだ  
（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）」<sup>(04)</sup>

トシは、いつまでも救いの言葉をかけてくれない兄に、裏切られたような気持ちになったのだろう。

兄から不意に視線をそらす。

そして、ついにこんな言葉までも……。

「(Ora Orade Shitori egumo) (※私は私で、ひとりで逝くもん)」<sup>(註10) (04)</sup>

必死に救いを求める愛する妹に、ひと言もかけてあげることができない兄。

それどころか、ぎりぎりのところまで追いつめられても、いまだ心が定まらない自分。

おのれのふがいなさに、きっと泣き伏したくなったことだろう。

賢治は、こう念じるばかりだった。

「ああそんなに  
かなしく眼をそらしてはいけない」<sup>(04)</sup>

「ひとりさびしく往かうとする」妹を、「正視」することさえできない自分。<sup>(04)</sup>

愛する妹を、せめても、心安らかに往生させたいという痛切な願い。

出口の見えない葛藤が、激しい苦悩と悪循環を生みだす。

賢治は、刻一刻、暗く危険な崖っ縁に追いつめられていくのであった。

## 【賢治と死 ②】

帰郷から一年あまりたった霜降月（※大正11年11月

27日）。

とうとう、恐れていたその時がやってきた。

「ああけふのうちにとほくへざらうとするいもうとよ  
ほんたうにおまへはひとりで行かうとするか  
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ  
泣いてわたくしにさう言つてくれ」<sup>(註07) (04)</sup>

その日の朝のこと。<sup>(註11)</sup>

トシは、唐突に兄に頼んだ。

「あめゆじゆとてちてけんじや（雨雪【※みぞれ】をとってきてください）」と。<sup>(註12) (04)</sup>

それは、「末期の水（死に水）」でもあったろう。

賢治は、愛する妹の最後のたべものを取ろうとして、「まがつたつぼだまのやうに」病室からあわてて飛びだした。「青い蓴菜もやうのついた」<sup>(註15) (04)</sup>、「ふたつのかけた陶碗」を握りしめて。

賢治は、外に飛び出し、空を見上げた。

蒼鉛色の暗い雲から、雨雪がびちびちよ落ちてくる。すると、どうしたことだろう。

「あめゆじゆとてちてけんじや」といったトシの真意が、自然にしみこんできたのである。

「ああとし子  
死ぬといふいまごろになつて  
わたくしをいつしやうあかるくするために  
こんなさつぱりした雪のひとわんを  
おまへはわたくしにたのんだのだ  
…はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから  
おまへはわたくしにたのんだのだ  
銀河や太陽、気圏などとよばれたせかいの  
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……」<sup>(04)</sup>

「巨きな信のちからからことさらにはなれ」<sup>(04)</sup>、「青ぐらい修羅をあるいてゐる」賢治。

「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれの」妹に、いまわの言葉ひとつかけられず、「かなしさうな眼をしてゐる」兄。<sup>(04)</sup>

このまま「ひとりさびしく往」けば、賢治は、まっ暗な後悔と自責の念に、生涯さいなまれつづけるにちがいない。<sup>(04)</sup>

そんな迷える兄を「いつしやうあかるくするために」、ひと碗の雪を頼んだのだ、と。<sup>(04)</sup>

このとき、トシの心情が、しっかりとわかった。

冥<sup>くら</sup>き途<sup>みち</sup>への淵<sup>ふち</sup>に立ちながら、それでも兄を気づかう慈<sup>じ</sup>愛<sup>あい</sup>にふれ、賢治は固く心に誓う。

「ありがたうわたくしのけなげないも<sup>妹</sup>うとよ  
わたくしもまつすぐにすすんでいくから」<sup>(04)</sup>、と。  
そして、賢治は、妹の想いに響<sup>き</sup>応<sup>よう</sup>し、心のかざり念じ  
た。

「おまへがたべるこのふたわんのゆきに  
わたくしはいまこころからいのる  
どうかこれが兜<sup>と</sup>率<sup>そつ</sup>の天<sup>てん</sup>の食<sup>じき</sup>に<sup>つ</sup>変<sup>わ</sup>つて  
やがてはおまへとみんなとに  
聖<sup>きよ</sup>い資<sup>しりょう</sup>糧<sup>りょう</sup>をもたらずことを  
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」<sup>(05)</sup> <sup>(註16)</sup>

——トシは、茶碗を受けとると、「さ<sup>つ</sup>ぱりした」雪の  
花を口にふくんだ。

そして、そえられた松の針を、「まるでとびつ<sup>よ</sup>くやうに」  
頬<sup>ほ</sup>にあて、こうつぶやく。<sup>(04)</sup>

「ああい さっぱりした  
まるで林のながさ来たよだ」<sup>(註17)</sup> <sup>(04)</sup>

やがて、迷いの消えた兄から『法華経』の死生観を聞  
き、「コハガラナクテモイ<sup>イ</sup>」<sup>(03)</sup>などと、やさしい言葉を  
かけてもらったにちがいない。<sup>(註18)</sup>

命の灯が消えかかろうとしていたときのこと。

父親が、「病氣ばかりしてずい分苦しかったナ。…今  
度は…いいところに生まれてくれよナ」<sup>(07)</sup>と語りかけた  
ことに對し、トシはこう答えた。

「また人に生まれてくるときは、こんなに自分のこと  
ばかりで苦しまないように生まれてきます（「うまれでく  
るたて こんどはこたにわりやのごとばかりで くるしま  
なあよにうまれてくる」）」<sup>(04)</sup> <sup>(註19)</sup>

自分のことばかりで苦しまないとは、裏を返せば、  
「他人のために苦しむことのできる人間に生まれてきま  
す」<sup>(註20)</sup>、ということである。

救われたのはむしろ、「巨<sup>おお</sup>きな信のちからからことさ  
らにはなれ」て、青ぐらい修羅<sup>しゅら</sup>を歩いてきた兄のほうで  
あったにちがいない。<sup>(04)</sup>

いよいよ死<sup>し</sup>期<sup>き</sup>が迫ったとき、賢治は、トシの耳もとで  
お題目を叫ぶと、トシは、二度うなずくように息をした。

こうして、いまわのきわに清<sup>きよ</sup>い言葉を残し、賢治に多  
大な影響を与えたトシは、24年の短い生涯を閉じたので  
ある。

最愛の妹を失った賢治は、押入れに首を突っこんで、  
泣くことしかできなかった。

亡<sup>なき</sup>骸<sup>がら</sup>は、野<sup>の</sup>天<sup>てん</sup>で薪<sup>たきぎ</sup>や萱<sup>かや</sup>を山積みにした状態<sup>だ</sup>で茶<sup>ち</sup>毘<sup>び</sup>に  
付<sup>ふ</sup>された。火葬場が火事で焼失していたからである。  
棺<sup>ひつぎ</sup>が燃えつきるまで、賢治は、一<sup>いっ</sup>心<sup>しん</sup>に法<sup>ほ</sup>華<sup>け</sup>経<sup>きょう</sup>をりん  
りと読みつづけたのであった。

### 【賢治と死 ③】

妹の死からおおよそ9か月。  
空<sup>うつせみ</sup>蟬<sup>せみ</sup>のごとく虚<sup>うつ</sup>ろな賢治は、トシの行<sup>ゆく</sup>方<sup>え</sup>（幻<sup>ゆく</sup>影<sup>えい</sup>）と死  
の意味を追い求め、一<sup>いち</sup>路<sup>ろ</sup>、夜<sup>よ</sup>汽<sup>き</sup>車<sup>しや</sup>で北<sup>きた</sup>へ向<sup>むか</sup>かう。

「こんなやみよののはらのなかをゆくときは  
客<sup>きやく</sup>車<sup>しや</sup>のまどはみんな水<sup>すい</sup>族<sup>じやく</sup>館<sup>かん</sup>の窓<sup>まど</sup>になる  
…あいつはこんなさびしい停<sup>てい</sup>車<sup>しや</sup>場<sup>ばう</sup>を  
た<sup>た</sup>つたひとりで通<sup>と</sup>つていつたらうか  
ど<sup>ど</sup>こへ行<sup>い</sup>くともわ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ないそ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>方<sup>ほう</sup>向<sup>きやう</sup>を  
ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>種<sup>しゆ</sup>類<sup>るい</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>界<sup>かい</sup>へは<sup>は</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>ち<sup>ち</sup>を  
た<sup>た</sup>つたひとりでさ<sup>さ</sup>び<sup>び</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>行<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>たら<sup>ら</sup>うか」<sup>(04)</sup>

「ああ何<sup>なに</sup>べん理<sup>り</sup>智<sup>ち</sup>が教<sup>くわ</sup>へても  
私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>び<sup>び</sup>し<sup>し</sup>さは<sup>は</sup>な<sup>な</sup>ほ<sup>ほ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い  
わ<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>感<sup>かん</sup>じ<sup>じ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>が<sup>が</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>空<sup>くう</sup>間<sup>かん</sup>に  
い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>現<sup>げん</sup>象<sup>じやう</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>る  
そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>さ<sup>さ</sup>び<sup>び</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>だ  
（そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>び<sup>び</sup>し<sup>し</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>死<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>だ）  
た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>へ<sup>へ</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>が<sup>が</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>き<sup>き</sup>ら<sup>ら</sup>び<sup>び</sup>や<sup>や</sup>か<sup>か</sup>な<sup>な</sup>空<sup>くう</sup>間<sup>かん</sup>で  
と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>子<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>づ<sup>づ</sup>か<sup>か</sup>に<sup>に</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>う<sup>う</sup>と  
わ<sup>わ</sup>た<sup>た</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>な<sup>な</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>感<sup>かん</sup>情<sup>じやう</sup>は  
ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>ど<sup>ど</sup>こ<sup>こ</sup>か<sup>か</sup>に<sup>に</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>子<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>ふ」<sup>(04)</sup>

心<sup>こころ</sup>時<sup>とき</sup>雨<sup>あめ</sup>る賢治は、さらに北<sup>きた</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>し、青<sup>あお</sup>森<sup>もり</sup>、旭<sup>あす</sup>川<sup>がわ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>へ</sup>  
て、北<sup>きた</sup>海<sup>かい</sup>道<sup>だう</sup>の<sup>の</sup>最<sup>さい</sup>果<sup>くわ</sup>て<sup>て</sup>・稚<sup>わ</sup>内<sup>ない</sup>に<sup>に</sup>いた<sup>た</sup>る。

が、賢治の旅はそこで終<sup>しま</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>い。  
果<sup>は</sup>て<sup>て</sup>は、日<sup>に</sup>本<sup>ぽん</sup>最<sup>さい</sup>北<sup>ほく</sup>端<sup>たん</sup>の<sup>の</sup>樺<sup>から</sup>太<sup>ふと</sup>（※<sup>き</sup>当<sup>たう</sup>時<sup>じ</sup>）の<sup>の</sup>終<sup>さい</sup>点<sup>てん</sup>・栄<sup>さかえ</sup>浜<sup>はま</sup>駅<sup>えき</sup>  
に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>移<sup>うつ</sup>ろ<sup>う</sup>。

その浜<sup>はま</sup>辺<sup>べ</sup>に行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>着<sup>き</sup>いた賢治は、トシの<sup>の</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>一<sup>いっ</sup>晩<sup>ばん</sup>中<sup>ちゆう</sup>、  
潮<sup>しお</sup>騒<sup>さい</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>に<sup>に</sup>祈<sup>いの</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>捧<sup>た</sup>げ<sup>げ</sup>た<sup>た</sup>ので<sup>ので</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>た。

この<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>鉄<sup>てつ</sup>道<sup>だう</sup>の<sup>の</sup>旅<sup>り</sup>は、『銀<sup>ぎん</sup>河<sup>が</sup>鉄<sup>てつ</sup>道<sup>だう</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>』と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>実<sup>み</sup>を<sup>を</sup>  
結<sup>むす</sup>ぶ。

妹<sup>い</sup>の<sup>の</sup>最<sup>さい</sup>期<sup>き</sup>の<sup>の</sup>願<sup>ねが</sup>いは、登<sup>えが</sup>場<sup>ばう</sup>人<sup>にん</sup>物<sup>ぶつ</sup>に<sup>に</sup>姿<sup>すがた</sup>を<sup>を</sup>変<sup>か</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>描<sup>えが</sup>き<sup>き</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>  
る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>る。

自己犠牲的ところをもった蠅。(註21)

みずからの命の危険を顧みず、川に落ちた友だちを救いだすも、力尽きてしまうカムパネルラ、となって。

賢治みずからもジョバンニに姿を変え、妹の化身・カムパネルラとともに銀河鉄道に乗りこむ。そして、ふたりいっしょの時を楽しくすごしたのである。

が、不意にジョバンニは気づいた。カムパネルラの姿がどこにもないことに。(註22)

すぐさま、「まるで鉄砲丸のやうに立ちあがり」「窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫」んだ。

「それからもう咽喉いっばい泣きだし」たのである。(08)

すると、いつのまにか、「さっきまでカムパネルラの座ってゐた席に黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人がやさしくわらって」座っているではないか。(08)

その男は、おもむろに口を開く。

「おまへのともだちがどこかへ行ったのだらう。あのひとはね、ほんたうに今夜遠くへ行ったのだ。おまへはもうカムパネルラをさがしてもむだだ」(08)

ジョバンニはすかさず問う。

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行かうと云ったんです」(註23)(08)

その大人は答える。

「あ、さうだ。みんながさう考へる。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあふどんなひとでもみんな何べんもおまへといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやっぱりおまへはさっき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しょに早くそこに行くがいい、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ」(註24)(08)

ここにたって、妹・トシへの個人的想いは、あらゆる人への想いへと昇華する。

妹を愛することは、すべての人を愛すること。すべての人を愛することは、妹を愛することだと悟ったのである。

しかもその愛は、ひとり、人間愛にとどまるものではない。

生きとし生きるすべてのものへと連なる普遍的愛なの

である。(註25)

その後の賢治は、妹の生まれ変わりのごとく、身を削るような奉仕に一身を捧げていく。

あるときは、貧しい農民のために、無償で肥料や土壌の設計を山ほどこなす。

またあるときは、農業指導に東奔西走。

そのさまは、『グスコブドリの伝記』で、飢饉に瀕した無縁の人びとを救うために、すすんで身命をなげうつ主人公を彷彿とさせよう。

#### 【賢治と死 ④】

ここで時間をさかのぼり、必死の想いで雨雪をとろうとしていた賢治に立ち返りたい。

賢治は、妹のために、なるたけきれいなみぞれを選ぼうとし、高やかな雪持松の枝からすくい取ろうと、二切れの御影石材にあぶなく立つ。

そのとき、じつはもうひとつ大切な気づきを得ていた。

その悟りとは……

「あんなおそろしいみだれたぞらから」落ちてきたものなのに、

「この雪はどこをえらぼうにも

あんまりどこもまつしろなのだ」(04)

ひるがえって、日々、私たちにふりつもる冷たい雪(冷厳な事実、厳しい状況)も、どれを選ぼうにも、じつは、どこも真っ白なのではないだろうか。

見上げる山にふりかかる雪も、見下ろす谷にふる雪も、雪に変わりはない。それ自体、きれいも汚いもないのである。

そこに色をつけ、差別し、あるいは排斥するもの。

それは、私たち自身の価値観であり、心なのである。

#### 【賢治と死 ⑤】

トシは、若くして死出の旅にでた。

けれども、賢治のなかで昇華され、愛しい精神の花を咲かせることになる。

そればかりではない。

私たちに、不朽の芸術的果実と豊かな心の糧をもたらしてくれた。

そして、賢治とトシは、珠玉の作品のなかで、今も生きつづけている。

#### 註

(註01)『岩手民報』は、「音楽教師と二美人の恋」という

タイトルで、つぎの記事を掲載した。一部のみ転載する。

「幸ひにも退校処分等を受ける様な事はなかつたけれ共、入学以来只一度も『組長』と言ふ名義を外の女に譲つた事のない彼女の女……文子（※トシの仮名）、學術優等品行方正と麗々敷書き記された幾枚かの賞状を重ねて、人からは後ろ指一度指された事のない文子も、一朝恋ひ焦れた先生に、一筋に思ひつめた心の届かぬのみか、ただ先生を驚かした許りで永久にぬぐふべくもあらぬ黒雲に包まれた儘文子の恋は哀れ片恋に終つて了つたのである」<sup>(01)</sup>

「爾来文子は朝に夕に快からぬ胸を抱いて通学して居たが、我恋の余りに悲惨な運命に呪はれたのに反して貴美子（※大竹いほの仮名）と先生の交情が益々濃くなりまさり行くに抑え難い恋心と嫉妬の炎に身を焼きつくさん許りに悩み入つた」<sup>(01)</sup>

では、なぜ、三日連続で、一般人にすぎない人たちのゴシップ記事を、しかも「真偽とりまぜた記事を出した」<sup>(02)</sup> だろう？

そのわけを、今野勉は『宮沢賢治の真実』のなかで、つぎのように解説している。

当時、「『岩手民報』と『岩手日報』という県内二紙が対立してい」て、「…それぞれが特定の政党を支持していた」。

「『岩手民報』は、「政党・立憲同志会を支持し、対立する保守政党・政友会を批判する激越な論調を展開。…政友会支持の『岩手日報』に対しても露骨な非難を浴びせていた」。「吐ざいたり日報紙」といった過激な調子で。

「『岩手民報』の『音楽教師と二美人の初恋』は、こうした激しい選挙戦の中で報じられたのである。

…当時、花巻町の住民は同志会、花巻川口町の住民は政友会、と明確に分かれていたのだ。すなわち、立憲同志会＝『岩手民報』＝花巻町であり、政友会＝『岩手日報』＝花巻川口町という構図だったのである。

…宮沢とし子（※トシ）の実家は、…花巻川口町の有力な資産家で母方の祖父である宮沢善治につながる。善治は、所得税の納税額で当時、県内十八位であった。宮沢善治が政友会派の後楯にちがいないと記者が考えたであろうことは、想像に難くない。

…さらに、もうひとつ。取材の途中、花巻高女の

卒業式の来賓に『岩手日報』の『花巻主任』…が入っていることを知った可能性がある。…立憲同志会の民報の記者は、花巻高女の卒業式に招かれていなかった。自らの新聞が軽んじられたと感じたそのとき、記者の良識の最後のタガが外れたのかもしれない」<sup>(12)</sup>

トシは、この記者についてこう述べている。

「彼女（※トシ）に致命傷を負はせた、あの真偽とりまぜた記事を出した新聞記者をも憎む事は出来なかった。彼女は彼が誰であるかを知っている。彼が享楽主義者で、物質上の貧窮が彼に思ふままの享楽を許さないのを人生最大の不幸な運命としてのろうてある様な人である事は彼の書く感想文などからうかがはれた。彼が全くおせっかいにも彼女の名誉を傷つけたと云う事は勿論彼女には大きな傷手であった。殊に家族の心がこれによってどれだけいたんだか、それは正視するのも彼女には恐ろしすぎる事であった。二重の意味で彼女は大打撃をうけた。にも拘らず彼女の心には最初から彼を憎む念が殆ど起らずにしまったのは不思議な事であった。『彼の様な人にはそう見えたのも無理はない』。『なぜ私は誤解されるのが当然な様な馬鹿な危険な事をしたらう？』

…彼女には世間を不当と責める権利がない。彼女は、黙って、人人の与へるものを受けなければならぬ」<sup>(02)</sup>

ちなみに、『岩手日報』は、大正5年12月で廃刊になっている。

ところで、兄の賢治は、いつごろ妹の恋愛事件を知ったのだろう？

新聞が掲載されたとき、実家がある花巻川口町にいたならば、当然、リアルタイムで耳目に飛びこんできたはずである。

当時、賢治はどこにいたのだろうか？

弟の宮沢清六も編集に携わった『新校本宮沢賢治全集第一六卷（下）補遺・資料年譜篇』の年譜に、このことは記されていない。

山根知子の『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』には、こうある。

「こうした顛末を当時自宅にいて盛岡高等農林への入学試験の準備を進めていた賢治は、どのように受けとめたのであろうか」<sup>(01)</sup>

たほう、今野勉の『宮澤賢治の真実』には、こう書かれている。

「この時期、賢治は花巻にいなかった。盛岡高等農林学校を受験するため、大正四年一月から盛岡で下宿生活をして勉学に励んでいた。三月末に入学試験があり、四月初旬に合格発表があって、四月八日から授業が始まった。賢治は事件について何も知らされなかった」<sup>(12)</sup>

いったい、どちらの記述が正しいのだろうか？

賢治は、『春と修羅』を「詩集」ではなく、「心象スケッチ」としていたように、そこには賢治の赤裸々な心象（※心に浮かぶイメージ）が刻印されている。

それならば、賢治がこの衝撃的事件を知ったなら、その後の心象スケッチに、彼の心象が反映されていないはずがない。

賢治がこの事件を初めて知り、みずからの心象を刻んだのは、いつ頃の、どの作品だろうか。

今野勉によれば、それは、妹の死のおよそ一ヶ月半前（大正 11 年 10 月 10 日）。

刻印されたのは『マサニエロ』<sup>(14)</sup>と、その延長線上にある同時期の文語詩『猥れて嘲笑めるはた寒き』<sup>(20)</sup>だという。

マサニエロ (Masaniello) とは、なにか。

オーベールが作曲した歌劇『ポルティチの唾娘』に登場する彼女の兄の名前である。この史実を元にした作品は、兄妹の悲劇を描きだす。

いっぽう、「猥れて嘲笑めるはた寒き」とは、どういう意味だろうか？

今野勉は、トシの恋愛事件にからめてこう解釈する。

「狎れ狎れしく猥らにつきあっていて裏で嘲笑うとは何と寒々しいことよ」

それゆえ今野は、賢治がこの時期に恋愛事件を知り、トシの『自省録』を読んだのではないかと推理している。

この仮説を援用すれば、トシが死ぬ前後の、賢治の尋常ならざる心の痛みを、より深く理解できるのではないだろうか。

(註 02) トシから英語を習っていた第 10 回生の柴田キヨ（※当時二年生）によると、トシは常々、「人のためになりたい、郷土のために働きたい」と語っていたという。<sup>(01)</sup>

(註 03) これらのトシの言葉は、彼女が書いた『自省録』から引用している。

トシは、これを恋愛事件の 5 年後の大正 9 年 2 月に書いた。

彼女は、この間の心の痛みや変化、成長について厳しく自分自身を見つめ、鋭い自己分析を加えている。

この文書は、宮澤淳郎（※賢治の末の妹クニのご子息。彼が『自省録』と名づけた）が、母親の死後、その遺品の中から見つけたもので、『伯父は賢治』（※ 1989 年 2 月出版）という著書のなかで、はじめて公開した。

(註 04) 『無声慟哭』<sup>(14)</sup>

こんなにみんなにみまもられながら  
おまへはまだここでもくしまなければならぬか  
ああ大きな信のちからからことさらにはなれ  
また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ  
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき  
おまへはじぶんにさだめられたみちを  
ひとりさびしく往かうとするか  
信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが  
あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて  
毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき  
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ

(おら、おかないふうしてらべ)

何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら  
またわたくしのどんなちいさな表情も  
けつして見通さないやうにしながら  
おまへはけなげに母に訊くのだ

(うんにや ずゐぶん立派だぢやい)

けふはほんとに立派だぢやい)  
ほんたうにさうだ

髪だつていつそうくろいし  
まるでこどもの苹果的頬だ  
どうかきれいな頬をして  
あたらしく天にうまれてくれ

《それでもからだくさえがべ?》

《うんにや いつかう?》

ほんたうにそんなことはない  
かへつてここはなつのはらの  
ちいさな白い花の匂でいつばいだから  
ただわたくしはそれをいま言へないのだ

(わたくしは修羅をあるいてゐるのだから)

わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは  
わたくしのふたつのころをみつめてゐるためだ



ああそんなに  
かなしく眼をそらしてはいけない

(註05)『春と修羅』という心象スケッチのタイトルは、  
悟りと迷いの象徴であろう

(註06)「毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき」の  
第一形態はつぎのとおり。  
「経をよめば暗い<sup>きのこ</sup> 草<sup>お</sup>のほいのただよふと  
き」<sup>(09)</sup>

(註07)『松の針』<sup>(04)</sup>

さつきのみぞれをとつてきた  
あのきれいな松のえだ [だ] よ  
おお おまへはまるでとびつくやうに  
そのみどりの葉にあつい<sup>ほほ</sup>頬をあてる  
そんな植物性の青い針のなかに  
はげしく頬を刺させることは  
むさぼるやうにさへすることは  
どんなにわたくしたちをおどろかすことか  
そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ  
おまへがあんなにねつに燃され  
あせやいたみでもだえてあるとき  
わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり  
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてみた  
《ああいい さつぱりした  
まるで林のながさ来たよだ》  
鳥のやうに栗鼠のやうに  
おまへは林をしたつてみた  
どんなにわたくしがうらやましかつたらう  
ああけふのうちにとほくへさうとするいもうとよ  
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか  
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ  
泣いてわたくしにさう言つてくれ  
おまへの頬の けれども  
なんといふけふのうつくしさよ  
わたくしは緑のかやのうへにも  
この新鮮な松のえだをおかう  
いまに雫<sup>しずく</sup>もおちるだらうし  
そら  
さはやかな  
ターペンティン<sup>ターペンティン</sup> にほい  
terpentine の匂もするだらう ※

※ terpentine……テレピン油。松脂<sup>まつやに</sup>を蒸留<sup>じょうりゅう</sup>してつくる。ねばり気と強い芳香<sup>ほうこう</sup>がある。

(註08)「ほかのひと」とは、だれか。

盛岡高等農林学校の同級生・保坂<sup>ほさか</sup>嘉内<sup>かない</sup>であり、  
この時期は、とりわけ3歳年下の稗貫<sup>へいくわん</sup>農学校同僚<sup>しん</sup>・堀籠<sup>ほりかみ</sup>文之進<sup>ひえぬき</sup>であった。

新全集年譜の大正10年12月下旬にこうある。

「堀籠の結婚するまで始終訪ね（翌年一月ころからさらに翌々年の三月ころまで週に一、二度、時には三日も四日も連夜）、『日蓮宗聖典』を進呈<sup>しん</sup>し、寿量<sup>じゅうりょう</sup>品<sup>ほん</sup>を一緒に斉唱<sup>せいしやう</sup>することもあった。また英語の勉強のため丸善<sup>まるぜん</sup>から取り寄せた『アラビアン・ナイト』の原書を読みあつた。いつも礼儀正しく挨拶し、必ず宿<sup>てみやげ</sup>へ手土産をもつていった」<sup>(18)</sup>

(註09)『恋と病熱』<sup>(04)</sup>

けふわたしの<sup>ひたひ</sup>額もくらく  
からす 鳥さへ正視できない  
いもうとはちやうどいまごろ  
つめたく陰気な青銅<sup>フロンゾ</sup>いろの病室で  
透明<sup>ばら</sup>薔薇の火に燃やされだす  
ほんたうに けれども妹よ  
けふはわたしもあんまり重くひどいから  
やなぎの花もとって行かない

(註10)「Ora Orade Shitori egumo」をひらがなで表せば、つぎのとおり。

「おらおらで しとりえぐも」(※私は私で、ひとりで逝くもん)

なお、この部分がローマ字表記である理由については、諸説ある。

- ①「もう死期が近づいて来て、ことばが聞き取りにくくなったのであろうか」<sup>(11)</sup>
- ②「賢治は、とし子の諦めと悲しみと孤独の言葉を書きとめるのがつらすぎて、あえてローマ字で書いたのだ、と私は思う」<sup>(12)</sup>
- ③「トシの言葉が、二人が好きだったアルカデルトのアヴェ・マアの一節『ora ora prono bis』を連想させたからではないか (ora というのは祈りの言葉)」<sup>(13)</sup>

(註11) この日の朝、トシの病状が急変する。看護婦が脈をとったところ、10秒に2つしか打たなかった。ちなみに、健康であれば、12~13打つ。<sup>(18)</sup>

(註12)『永訣の朝』<sup>(05)</sup>

けふのうちに  
 とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ  
 みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ  
 (あめゆじゆとてちてけんじや)  
 うすあかくいつそう陰惨な雲から  
 みぞれはびちよびちよふつてくる  
 (あめゆじゆとてちてけんじや)  
 青い蕁菜のもやうのついた  
 これらふたつのかけた陶椀に  
 おまへがたべるあめゆきをとらうとして  
 わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに  
 このくらいみぞれのなかに飛びだした  
 (あめゆじゆとてちてけんじや)  
 蒼鉛 いろの暗い雲から  
 みぞれはびちよびちよ沈んでくる  
 ああとし子  
 死ぬといふいまごろになつて  
 わたくしをいつしやうあかるくするために  
 こんなさつぱりした雪のひとわんを  
 おまへはわたくしにたのんだのだ  
 ありがたうわたくしのけなげないもうとよ  
 わたくしもまつすぐにすすんでいくから  
 (あめゆじゆとてちてけんじや)  
 はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから  
 おまへはわたくしにたのんだのだ  
 銀河や太陽 気圏などよばれたせかいの  
 そらからおちた雪のさいごのひとわんを……  
 ……ふたきれのみかげせきざいに  
 みぞれはさびしくたまつてゐる  
 わたくしはそのうへにあぶなくたち  
 雪と水とのまつしろな二相系をたち (註13)  
 すきとほるつめたい雫にみちた  
 このつややかな松のえだから  
 わたくしのやさしいもうとの  
 さいごのたべものをもらつていかう  
 わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ  
 みなれたちやわんのこの藍のもやうにも  
 もうけふおまへはわかれてしまふ  
 (Ora Orade Shitori egumo)  
 ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ  
 あああのとざされた病室の  
 くらいびやうぶやかやのなかに (註14)  
 やさしくあをじろく燃えてゐる  
 わたくしのけなげないもうとよ  
 この雪はどこをえらばうにも  
 あんまりどこもまつしろなのだ  
 あんなおそろしいみだれたそらから

このうつくしい雪がきたのだ  
 (うまれでくるたて  
 こんどはこたにわりやのごとばかりで  
 くるしまなあよにうまれでくる)  
 おまへがたべるこのふたわんのゆきに  
 わたくしはいまころからいのる  
 どうかこれが兜率の天の食に変わつて  
 やがておまへとみんなとに  
 聖い資糧をもたらすことを  
 わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

(註13) 二相系とは、「<sup>みぞれ</sup>糞が、雨の『液相』と雪の『固相』の二つの姿を持っているということ」<sup>(12)</sup>である。

けれども、賢治においては、これにとまらない。『永訣の朝』を例にとり、<sup>はらしろう</sup>原子朗はこう説く。

「まず『ふたつのかけた陶椀』がでてくる(欠けているのは幼時から二人で使い古してきたことを暗示しているのだが)。つぎに『ふたきれのみかげせきざい』、そして『二相系』、最後に『ふたわん』がまた繰り返されている。これらの『二』という数詞は、いうまでもなく精神的に一心同体だった自分と妹の二者を意識し、かつ今後別々の二つの生きかたを余儀なくされた運命をも暗示している」<sup>(19)</sup>

(註14) 「ああのとざされた病室の  
 くらいびやうぶやかやのなかに」<sup>(14)</sup>

なぜ、冬なのに、蚊帳がつけられていたのだろうか？  
 また、なぜ屏風が置かれていたのだろうか。  
 妹のシゲが、病室の状況についてこう記している。

「ほんとうにあの病室は何と貧弱だったでしょう。高い所に明かり取りにつけた窓は素通しのガラス戸一重で、外の冷たい空気は遠慮なく部屋に入り込みます。

赤くおこした炭火を火鉢に入れて、部屋の隅々においたって、天井は高いし室内が暖まる訳には行きません。

空気が動けばとし子姉さんはすぐにせき込むのです。少しでも空気の動くのを防ごうとかやを吊り、屏風を回してという具合でした」<sup>(17)</sup>

(註15) 賢治には、2歳下にトシ、5歳下にシゲ、8歳下に清六、11歳下にクニの兄弟姉妹がいた。二女のクニは、『屋根の上が好きで兄と私』のなかで、そのときの様子を書き記している。

「大正十一年の十一月二十七日、花巻はみぞれでした。

急いで病室を出て、賢さんについて、私も下駄をはいて台所口から庭に出ました。

ビチョビチョと降る雨雪にぬれる兄に傘をさしかけながら、そこに並べてあるみかげの土台石のついで緑の松の葉に積もった雨雪を両手で大事に取るのを茶碗に受けて、そして松の小枝も折って、病室に入りました。

ほんとうにあの病室は何と貧弱だったでしょう。高い所に明かり取りつけた窓は素通しのガラス戸一重で、外の冷たい空気は遠慮なく部屋に入り込みます。

赤くおこした炭火を火鉢に入れて、部屋の隅々においたって、天井は高いし室内が暖まる訳には行きません。

空気が動けばとし子姉さんはすぐにせき込むのです。少しでも空気の動くのを防ごうとかやを吊り、屏風を回してという具合でした。

賢治兄さんは何か言いながら採ってきた松を枕元に飾り、お茶碗の雪を少しづつさじですくって食べさせてあげましたっけ」<sup>(07)</sup>

(註16) 『永訣の朝』の初稿では、終わりの部分が、以下のようにになっている。

「どうかこれが天上のアイスクリームになって  
おまへとみんなに聖い資糧をもたらすやうに  
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」<sup>(09)</sup>

(註17) 「まるで林のながさ来たよだ」というトシの感激は、4か月前の別荘での出来事が、背景にある。

「七月末のそのころに  
思ひ余つたやうにとし子が言った  
《おらあど死んでもいい、はんと  
あの林の中さ行くだい  
うごいで熱は高くなつても  
あの林の中でだらほんとに死んでもいいは  
んて》」<sup>(04)</sup>

このとき賢治は、妹の体調を気遣って、願をかなえてあげることはなかった。

それ以降、トシは寡黙になってしまったという。<sup>(12)</sup>

(註18) 賢治の『一九二九年二月』という詩のなかに、こうある。

「生もこれ妙法の生  
死もこれ妙法の死」<sup>(10)</sup>

また、『雨ニモマケズ』の一節に、こうある。

「南ニ死ニサウナ人アレバ  
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」<sup>(06)</sup>

(註19) 賢治の5歳年下の妹・シゲによれば、トシのこの言葉は、つぎの経緯で語られたものであるという。

父がお医者様とお話して来られたのか、静かにかやの中に入ってから脈を調べながら泣きたいのをこらえた顔で、

「病氣ばかりしてずい分苦しかったナ。人だなんてこんな苦しい事ばかりいっばいでひどい所だ。今度は人になんか生まれなくて、いいところに生まれてくれよナ」と言いました。

としさんは少しほほえんで、

「生まれて来るって、こったに自分の事ばかりで苦しめないように生まれて来る」と甘えたように言いました。

私はほんとに、ほんとにと思ひながら身をぎっちり堅くしていたら、父が、「皆でお題目を唱えてすけて(※助けて)あげなさい」と言います。

気がついたら、一生懸命高くお題目を続けていました。そして、とし子姉さんはなくなったのです。

その後は夢のようで、いつ夜になったのかどこで眠ったのか、夜中、賢治兄さんのお経の声を聞いていたようでした。

夜明けに、袴をはいたとしさんが、広い野原で一人、花をつんでいるのがあんまり淋しそう、たまらなく、高い声で泣いて目を覚ましましたら、賢さんがとんできて、

「何して泣いた？ としさんの夢を見たか？」と差し迫った声で聞いたので、また悲しくなって、

「それだって、一人で黄色な花っことるべかなって言ったっけも」とまた泣きました。<sup>(07)</sup>

このことは、『春と修羅 第一集』に収められた『青森挽歌』のつぎの箇所反映されている。

「わたくしたちが死んだといつて泣いたあと  
とし子はまだまだこの世かいのからだを感じ  
ねつやいたみをはなれたほのかなむりのなかで  
ここでみるやうなゆめをみてみたかもしれない  
そしてわたくしはそれらのしづかな夢幻が  
つぎのせかいへつゞくため

明るい、匂のするものだったことを  
 どんなにねがふかわからない  
 ほんたうにその夢の中のひとくさは  
 かん護とかなしみとにつかれて睡つてゐた  
 おしげ子たちのあけがたのなかに  
 ほんやりとしてはいつてきた  
 《黄いろな花こ おらもとるべがな》  
 たしかにとしはあのあけがたは  
 まだこの世かいのゆめのなかにゐて  
 落葉の風につみかさねられた  
 野はらをひとりあるきながら  
 ほかのひとのこのやうにつぶやいてゐたのだ  
 そしてそのままさびしい林のなかの  
 いつびきの鳥になつただらうか<sup>(4)</sup>

父・政次郎は、お念仏「南無阿弥陀仏」の熱心な信者であり、賢治と激しい宗教論争をくり広げてきた。

「今度は人になんか生まれなくて、いいところに生まれてくれよナ」と語ったのは、「南無阿弥陀仏」(※阿弥陀仏に帰依しますの意)を唱えることにより、死後、極楽に往生できるとする浄土真宗の教えにもとづくものであろう。

しかしながら、その父が、賢治と信仰をとにもするトシのために、お題目「南無妙法蓮華経」を唱え、助けてあげなさいと語ったことは、まことに感慨深い。

なお、「それだって、一人で黄色な花ことするべくなって言ったっけも」というシゲの夢は、『青森挽歌』のなかの「黄いろな花こ おらもとるべがな」の文言などに連綿とつながっていく。

(註 20) トシの言葉の真意は、彼女が23歳(※大正9年2月9日)の終わりに記した『自省録』(※1920年2月)の文脈なかで理解される必要があろう。

トシは、こう述べている。

「冷酷な世間を止むを得ず是認する前に、自身を世間に対して冷酷でなかったか、と反省する必要があるはしないか」

「『これが真の愛ではない』と見分けう一つの路は、それが排他的であるかないか、と云ふことである」

自分たちが「求めたものは畢竟 彼等(※自分たち)の幸福のみで、それがもしも他の人人の幸福と両立しない場合には、当然利己的に排他的になる性質の

ものではなかったか？」

自分は、「最早現状に満足せずして高められ浄めらるるを求むると云うに躊躇しない」

「盲目な痴愚な愛に満足しない、求めないと云うに躊躇しないであらう」

「凡ての人人に平等な無私の愛を持ちたい」<sup>(2)</sup>

「『願はくはこの功德を以て普ねく一切に及ぼし我等と衆生と皆俱に——』と云う境地に偽りのない渴仰を捧げる事は彼女(※自分)に許されない事とは思えないのである」<sup>(2)</sup>

「わがあやまちを許させたまへと祈らねばならぬ」

自分には自分を「正当に理解しなかった世の人々を責める資格は、ないのであった。憤りの代わりに謙遜と寛容とを学ばねばならなかった」

「自分の過ちに心を碎かれる事なく、もしもあのまま何事もなく進んでついに一点非の打ちどころのない生活に入り得たとしたら、…真の人間にはなり得なかったかも知れない」

自分が「大乘の煩惱即菩提の世界に憧憬と理想とをおいてゐる事は疑ひなかった。その理想に照らして、今彼女(※自分)に苦痛をとおして与へられた賜物の意味を考へる時、…今まで恥辱と悔とに真暗であったとの過去の経験に、思ひもよらぬ光明を見るのである」

また、既述のように、トシが常々、「人のためにになりたい、郷土のために働きたい」<sup>(1)</sup>と語っていたことも踏まえて解釈する必要がある。

したがって、トシの言葉をつぎのように解釈する今野勉説は、トシの真意を矮小化した見方ではないか、と私は思う。

「こんど生まれてくるとしたら、自分のことばかりで悩み苦しんだような人生は送りたくない。心から愛しあえる人にめぐりあって、二人の愛がみんなへの愛になるようなそんな人生を送りたい」<sup>(12)</sup>

(註 21) 蠍の話

イタチに見つかり、食べられそうになった蠍は、逃げた拍子に井戸に落ちてしまう。

溺れ死ぬというまさにそのとき。蠍はこういって祈った。

「あゝ、わたしはいままでいくつのものの命をとつ

たかわからない、そしてその私がこんどいたちにと  
られやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。  
それでもたうたうこんなになってしまった。

…どうしてわたしはわたしのからだをだまってい  
たちに呉れてやらなかったらう。そしたらいたちも  
一日生のびたらうに。どうか神さま。私の心を  
ごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうか  
この次にはまことのみんなの幸のために私のからだ  
をおつかひ下さい」<sup>(6)</sup>

(註22) 以下は、『銀河鉄道の夜 初期形三』<sup>(8)</sup>より引用。

(註23) 「ありがとうわたくしのけなげないもうとよ  
わたくしもまつすぐにすすんでいくから」<sup>(4)</sup>  
を念頭においた言葉であろう。

(註24) このセリフは、『春と修羅』に収められた『オホー  
ツク挽歌』のつぎの部分の延長線上にあると思われ  
る。

「わたくしがまだとしの子のことを考へてみると  
なぜおまへはそんなにひとりばかりの妹を  
悼んであるかと遠いひとびとの表情が言ひ  
またわたくしのなかでいふ」<sup>(4)</sup>

また、『青森挽歌』のつぎの箇所も、これと連なるで  
あろう。

「 《みんなむかしからのきやうだいなだから  
けつしてひとりをいのつてはいけない》  
ああ わたくしはけつしてさうしませんでした  
あいつがなくなつてからあとのよるひる  
わたくしはただの一どたりと  
あいつだけがいとこに行けばいと  
さういのりはしなかつたとおもひます」<sup>(4)</sup>

さらに、このセリフは、賢治の童話『手紙四』を  
想起させよう。

これは、チュンセという兄と、ポーセという妹の  
物語である。

以下の文を読めば、モデルが賢治とトシであり、  
舞台は『永訣の朝』と同じであることがわかるであ  
らう。

「ポーセは、十一月ころ、俄かに病気になるたので  
す。おつかさんもひどく心配さうでした。チュンセが行  
つて見ますと、ポーセの小さな唇はな〔んだ〕か青

くなつて、眼ばかり大きくあいて、いつばいに涙を  
ためておきました。…チュンセは…云ひました。『雨  
雪とつて来てやろか。』『うん。』ポーセがやつと答へ  
ました。チュンセはまるで鉄砲丸のやうにおもてに  
飛び出しました。おもてはうすくらくてみぞれがび  
ちよびよ降つておきました。チュンセは松の木の枝  
から雨雪を両手にいつばいとつて来ました。それか  
らポーセの枕もとに行つて皿にそれを置き、さじで  
ポーセにたべさせました。ポーセはおいしさうに三  
さじばかり喰べましたら急にぐたつとなつていきを  
つかなくなりました。おつかさんがおどろいて泣い  
てポーセの名を呼びながら一生けん命ゆすぶりまし  
たけれども、ポーセの汗でしめつた髪の毛はたゞゆ  
すぶられた通りうごくだけでした。チュンセはげん  
こを眼にあてて、虎の子供のやうな声で泣きまし  
た」<sup>(15)</sup>

その後、チュンセは、妹を「一生けん命そこらをさ  
がしたり考へたりしてみましたがないのわからな  
いのです。…けれども私にこの手紙を云ひつけたひ  
とが云つておきました『チュンセはポーセをたづねる  
ことはむだだ。なぜならどんなことでも、また、  
はたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で華果  
をたべてゐるひと〔で〕も、また歌ふ鳥や歌はない  
鳥、青や黒やのあらゆる魚、あらゆるけものも、あ  
らゆる虫も、みんな、みんな、むかしからのおたが  
ひのきや〔う〕だいなだから。チュンセがもしも  
ポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな  
勇気を出してすべてのいきもののほんたうの幸福を  
さがさなければいけない。…チュンセがもし勇気  
のあるほんたうの男の子ならなぜまつしぐらにそれに  
向つて進まないか』」<sup>(15)</sup>

ところで、カムパネルラのモデルとして、以下の  
二つの主要な説がある。

- |   |
|---|
| ① 「カムパネルラ=トシ」説。<br>② 「カムパネルラ=保坂嘉内 (1896~1937)」<br>説。 <sup>(16・17)</sup> |
|---|

保坂は、盛岡高等農林学校の同級生であり、親友  
でもあった。

が、執筆当時、信仰や方向性の違いにより、実質  
的に決別している。

では、どちらが、カムパネルラの中心的モデルな  
のか。

『銀河鉄道の夜 初期形三』と『手紙四』<sup>(註22)</sup>の類  
似に鑑みれば、亡くなったカムパネルラ(※自己犠

性的精神の持ち主)の最終的モデルが、死せる妹・トシである、と私は考える。執筆当時、生ける保坂の要素が、少なからず盛りこまれていたとしても。

(註 25) このことは、『注文の多い料理店』や『なめとこ山の熊』、『よだかの星』などを読めば明らかであろう。

#### 引用文献

- (01) 山根知子. (2003.9.21). 宮澤賢治 妹トシの拓いた道. 朝文社.
- (02) 宮澤淳郎. (1989.2.25). 伯父は賢治. 八重岳書房.
- (03) 畑山博. (1988.11.20). 教師 宮澤賢治のしごと. 小学館.
- (04) 宮澤賢治. (1995.7.25). 新校本 宮澤賢治全集第二卷 詩 I 本文編. 筑摩書房.
- (05) 宮澤賢治 著／天沢退二郎 編. (1991.7.30). 宮澤賢治詩集. 新潮社.
- (06) 宮澤賢治. (1997.7.30). 新校本 宮澤賢治全集第十三卷 (上) 覚書・手帳 本文編. 筑摩書房.
- (07) 岩田シゲ, 他. (2017.12.20). 屋根の上が好きなお兄と私. 蒼丘書林.
- (08) 宮澤賢治. (1995.9.25). 新校本 宮澤賢治全集第十卷 童話Ⅲ 本文編. 筑摩書房.
- (09) 宮澤賢治. (1995.7.25). 新校本 宮澤賢治全集第二卷 詩 I 校異編. 筑摩書房.
- (10) 宮澤賢治. (1995.8.25). 新校本 宮澤賢治全集第五卷 詩Ⅳ本文編. 筑摩書房.
- (11) 紀野一義. (1968.5.8). 佛との出会い. 筑摩書房.
- (12) 今野勉. (2017.2.25). 宮澤賢治の真実. 新潮社.
- (13) 萩野貞樹 監修. (2006.11.24). 宮澤賢治. リヨン社.
- (14) 宮澤賢治. (1996.1.25). 新校本 宮澤賢治全集第十一卷 童話Ⅳ本文編. 筑摩書房.
- (15) 宮澤賢治. (1995.11.25). 新校本 宮澤賢治全集第十二卷 童話Ⅴ・劇・その他 本文編. 筑摩書房.
- (16) 菅原千恵子. (1997.11.25). 宮澤賢治の青春. 角川書店.
- (17) 江宮隆之. (2008.2.19). 二人の銀河鉄道 嘉内と賢治. 河出書房新社.
- (18) 宮澤賢治. (2001.12.10). 新校本 宮澤賢治全集第十六卷 (下) 補遺・資料 年譜篇. 筑摩書房.
- (19) 原子朗. (1981.6.30). 鑑賞 日本現代文学第 13 卷 宮澤賢治. 角川書店.
- (20) 宮澤賢治. (1996.10.10). 新校本 宮澤賢治全集

#### 第七卷 詩Ⅳ本文編. 筑摩書房

#### 参考文献 (※引用文献を除く)

- 伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉 編. (1968.3.5). 日本の詩歌 18 宮澤賢治. 中央公論社.
- 山下聖美. (2008.9.20). 宮澤賢治のちから. 新潮社.
- 山下聖美. (2002.9.20). 検証・宮澤賢治の詩 I 「春と修羅」. 鳥影社.
- 佐々木賢二. (2011.5.30). 宮澤賢治『銀河鉄道の夜』の真実を探って. 誠文堂新光社.
- 伊藤信吉. (1968.10.30). 詩のふるさと. 新潮社.
- 宮沢清六. (1991.12.4). 兄のトランク. 筑摩書房.
- 吉本隆明, 天沢退二郎, 山折哲雄, 他. (2010.6.10). 宮澤賢治を旅する. 小学館. サライ 7 月号, 22 (7): 18-83.
- 堀尾青史. (1991.1.25). 年譜 宮澤賢治伝. 中央公論社.
- 山内修 編著. (1989.9.18). 年表作家読本 宮澤賢治. 河出書房新社.
- 竹内清乃 編集. (2014.5.21). 宮澤賢治 おれはひとりの修羅なのだ. 平凡社. 別冊太陽 日本のこころ 218.
- 宮澤賢治. (1990.12.20). 銀河鉄道の夜. 集英社.
- 宮澤賢治. (1996.5.25). 銀河鉄道の夜. 角川書店.
- 天沢退二郎 編. (2001.4.1). 宮澤賢治万華鏡. 新潮社.
- 天沢退二郎 編. (1996.6.25). 宮澤賢治ハンドブック. 新書館.
- 天沢退二郎. (1986.9.30). 《宮澤賢治》鑑. 筑摩書房.
- 天沢退二郎. (2009.7.25). 《宮澤賢治》のさらなる彼方を求めて. 筑摩書房.
- 天沢退二郎・中村稔 他. (1973.12.1). 國文學 解釋と鑑賞 宮澤賢治の世界. 至文堂.
- 天沢退二郎・栗原敦・杉浦静 編. (2011.5.10). 図説 宮澤賢治. 筑摩書房.
- 栗原敦. (2005.10.1). 宮澤賢治. NHK 出版.
- 上田哲 他. (1996.3.25). 図説 宮澤賢治. 河出書房新社.
- 山下聖美. (2017.3.1). 宮澤賢治スペシャル. NHK 出版.
- 堀尾青史. (1991.1.25). 年譜 宮澤賢治伝. 中央公論社.
- 見田宗介. (2001.6.15). 宮澤賢治 存在の祭りの中へ. 岩波書店.
- 井上ひさし. (2002.12.10). 宮澤賢治に聞く. 文藝春秋
- 小柳学. (2004.11.25). 宮澤賢治が面白いほどわかる

- 本, 中経出版.
- 栗谷川虹. (1997.1.25). 宮沢賢治 異界を見た人. 角川書店.
- 桜田満 他 編. (1974.8.30). 現代日本文学アルバム 第10巻 宮澤賢治. 学習研究社.
- 原子修. (1993.4.15). 宮澤賢治論—銀河のいざない—. 土曜美術社出版販売.
- 丹治昭. (1996.10.15). 宗教詩人 宮沢賢治. 中央公論社.
- 西田良子 編. (1992.2.1). 宮沢賢治を読む. 創元社.
- 金子民雄. (1984.9.1). みちのくのメルヘン 宮沢賢治 イーハトヴの世界. そしえて.
- 田口昭典. (2006.9.21). 宮沢賢治と法華経について. でくのぼう出版.
- 坂本幸男・岩本裕 訳注. (1991.6.26). 法華経(上)(中)(下). 岩波書店.
- 植木雅俊. (2015.3.24). サンスクリット原典現代語訳 法華経(上)(中). 岩波書店.
- 植木雅俊. (2018.4.1). NHK テキスト法華経. NHK 出版.
- 植木雅俊. (2011.10.25). 仏教, 本当の教え. 中央公論新社.
- 橋爪大三郎・植木雅俊. (2015.10.10). ほんとうの法華経. 筑摩書房.
- 紀野一義. (1985.7.2). 賢治の神秘. 佼成出版社.
- 紀野一義. (1982.6.20). 「法華経」を読む. 講談社.
- 紀野一義. (1983.3.25). 名僧列伝(三) 念仏者と唱題者1. 角川書店.
- 紀野一義 他. (1980.6.1). 8人の祖師たち. 水書坊.
- 紀野一義・梅原猛. (1969.9.10). 仏教の思想12 永遠のいのち(日蓮). 角川書店.
- 梅原猛. (1985.7.2). 賢治の宇宙. 佼成出版社.
- 鳥山敏子. (1996.2.27). 賢治の学校. サンマーク出版.
- 畑山博. (1988.11.20). 教師 宮沢賢治のしごと. 小学館.
- 松原泰道. (1983.7.5). 法華経入門. 祥伝社.
- 佐々木閑. (2017.4.5). 集中講義 大乘仏教 こうしてブッダの教えは変容した. NHK 出版.

## Miyazawa Kenji and His Sister Toshi

ENDO Hitoshi

### Abstract

Kenji Miyazawa (27 August 1896 - 21 September 1933) was a Japanese novelist and poet born in Hanamaki, Iwate Prefecture. He and his younger sister Toshi (5 November, 1898 - 27 November, 1922) worshiped the Lotus Sutra and Nichiren Buddhism. Meanwhile, his family except them worshiped Jodo Shinshu, founded by Shinran Shonin (Saint Shinran).

After graduating from Japan Women's University in Tokyo, Toshi returned to her hometown Hanamaki and became a teacher at her alma mater.

But, about a year later, Toshi had pulmonary tuberculosis and left school. In addition, her condition was getting worse and she was almost dying.

Afraid of death, Toshi turned to her brother Kenji, who had same religion, to seek salvation. However, at that time, Kenji was losing faith and suffering deeply. He could not even stare at his sister.

Toshi asked him to take the sleet.

Suddenly Kenji understood the true meaning of her word when he was picking up the sleet from pine tree in home garden. The intent was to save her brother.

After his sister's death, Kenji regained his faith, wrote many wonderful poems and fairy tales, and helped poor peasants.



